

公共ホールをハックする ～ タクティカル・アーバニズムから考える公共ホールの可能性 ～

長崎市チトセピアホール館長 出口 亮太

1 地方のホールの現状把握と問題認識

地方の中小規模の公共ホールが抱える課題＝人材難と資金難が連鎖して併存

“富めるホール”と“そうじゃないホール”の二極化

でも、“そうじゃないホール”には“そうじゃないホール”なりの事業運営が出来るのではないか

公共ホールには人材・機材という意味で、ある程度のスペックが標準装備されているはず

公共ホールが持ち合わせているポテンシャルを活用し、効果的・効率的に運営しよう

2 チトセピアホールの概要

複合施設チトセピアの中にあるホール（イオン・テナント・市役所支所・公民館・図書館・集合住宅が併設）

可動式客席 500 席・平土間仕様で 750 名収容

施設は舞台・客席・楽屋・ロビーのみの構成

職員数 5 名（館長・総務・舞台・音響・照明）

稼働率＝平成 29 年度 70.8% 平成 27～29 年平均 64.4%（平成 24～26 年平均＝59.2%）

貸館としての運営は利用料金制と委託料金制との併用制（自主事業予算は無し）

3 ゼロから自主事業を始める

平成 27 年、確保日程・事業予算・事業実績＝ゼロという悪条件のもとで自主事業をスタート

➔ 消去法で残された事業形態に新たな価値を見出す

4 チトセピアホールの自主事業

■タクティカル・アーバニズム（Mike Lydon , Anthony Garcia , 2011）

地域の団体や民間企業が省庁や自治体と協働して、安価で短期的な都市空間への戦術的介入を、長期的な行政主導の戦略的都市計画の道標として実践すること。（Short-term Action for Long-term Change）

リーマンショック以降の大不況を背景に、民間主導の L.Q.C.（Light Quick Cheap）な活動スタイル、多様な市民参加、インターネットを利用したノウハウのオープンソース化を特徴とする。

<u>タクティカル・アーバニズム</u> (戦術的)	<u>ストラテジック・アーバニズム</u> (戦略的)
民間・地域・市民主導	行政主導
短期スパン	長期スパン
ボトムアップ	トップダウン
現場でのアイデア	マスタープラン
既存リソース活用	ハード整備
低コスト	高コスト

公共ホールにおけるタクティカル・アーバニズムの援用

= 公共の精神にもとづいた合法的・一時的な目的外（想定外）利用

= 『公共ホールをハックする』

➔ 従来の行政主導の文化行政の補完を目的とする試み

【企画】 = サブカルチャー、というよりもむしろ“現在進行系”の企画内容

人工比と経済合理性に抗って地方における地域内の文化環境に多様性をもたらす

都市／地方間における文化資本金格差問題の解消へ

【場所】 = オルタナティブスペースの発想から、既存の“舞台／客席”という関係性を捉えなおす

企画内容に合わせて会場をつくり、ホールの新しい活用法・価値を提案する

上演・鑑賞施設から意思を持って企画運営を行う事業主体へ

【予算】 = DIYな事業運営で、例えば 2500 円×80 人、3000 円×60 人のチケット売上で成り立つ収支計画

オルタナティブスペースの発想で、バジェットとコンテンツとヴェニューの関係を弾力的に

広報ツール（web、SNS）とコスト、ターゲットのマッチング

【協働】 = 他分野とのコラボレーションを通して、“公共の理念”をアップデート

劇場法を図書館法・博物館法・社会教育法・都市公園法と比較、公共施設の先達に学ぶ

経済合理性にそってすすめられる「選択と集中」のなかで自らの存在価値・根拠を明確にする必要性

5 自主事業を実施する意義と目的

事業ノウハウの確立と普及、理論と実践のサイクルを続けていく

事業を継続していくことで、同じような境遇や方向性を共有したパートナーとのフラットなネットワークを構築

6 チトセピアホールなりの事業スタイル

■ 企画の同時代性

■ 空間の有効活用

■ 持続可能な収支計画

■ 公共の理念の更新

地域のニーズや時代の流れを取り入れたボトムアップの事業企画

インディペンデントな収支計画によって、外部要因に左右されない事業運営を行う

“規模の小ささを活かした機動性”と“無理なく責任が取れる事業規模”

本講へのご質問・ご意見は
下記サイトからどうぞ！

Sli.do
#7235